

## 海外特派記者の備忘録

### ～マイク片手に叱られっ話～ ①

佐々木 弘

平成 22 年 9 月末のテレビニュースが「日本航空の成田～サンパウロの定期空路、ラスト・フライト」を伝えていました。昭和 54 年、直行定期便として地球を半周する世界最長の路線を「売り」にデビューしました。

しかしやがて大量輸送、スピードという時代の流れの中で 25 時間という飛行時間の長さは決定的な「不利」となり、ついに 32 年目にしてラスト・フライト。昨今、航空路線の新設・廃止は経済原則に則り頻繁ですが、このニュースにはいささかの感慨を覚えずにはられません。

思い起こせば 30 年前、JNN 系（TBS・HBC）テレビニュースの特派員としてブラジルのサンパウロに駐在するため、この路線に初めて搭乗しました。当時「大空の貴婦人」と呼ばれた DC-8 というスマートな機種が就航していました。

決してゆったりとは言えないものの「貴婦人」の膝に座り続けるのですから、文字通り天にも昇る喜びにしばし浸りました。しかしさすがに丸一日、貴婦人の膝にお世話になるのは気が引けるところかいささか苦痛。機内を歩き回って浮気（？）せざるを得ませんでした。

しかも時差の関係からか搭乗後すぐに昼食。ベルトを少し緩めウトウトし始めると「軽食は如何です？」とスチュワーデス（当時は若い女性の憧れの職業名）の素敵なお誘い。当然これには笑顔で応えてしまいます。しかし暫くすると結構豪華な夕食が出て、当然のごとく完食。ブランデーで憩う間もなくやがて夜食が出て、しばしまどろむとまた朝食。まるでプロイラー状態です。

もっとも当時はエコノミー席でもアルコールは飲み放題。（私だけだったのかも）食事そっちのけでひたすら酔い続け、スチュワーデスに「飛行高度が高いので少しお控えになられた方が・・・」とやんわり教育的指導される始末。「叱られっ話」～その 1～ となりました。

当時はまだ「エコノミー症候群」などという珍妙な差別的病名も対処療法もない時代でしたので、旅行者は狭い機内を鶴のマークの入った素敵なおスリッパでぶらぶら歩きをするのが常態でした。現在は「旅行者血栓症」という判り易い診断名が定着し、機内でアルコールをがぶ飲みする輩は激減しているようです。

しかし食事時にアルコール類を友とする習慣のきっかけは、サンパウロ行きの「大空の貴婦人」に教わったもので今なおその教えを守っています。

かくしてブラジル第二の大都市サンパウロで駐在特派員一家5人（妻と幼児3人）の珍生活が始まりました。

誰からも誉められる所か、叱られっ放しの「叱られっ話」～その2～ は南極大陸まで行ってみましようか。

## 海外特派記者の備忘録

### ～マイク片手に叱られっ話～ ②

さて、今回はブラジルに転勤するための飛行機の中でスチュワーデス（今はキャビンアテンダント）さんにやんわり叱られた話。さて2回目は、わざわざ南極大陸に渡っての話です。

南極大陸が何処の国にも属さない、何処の国の領土でもない、というのは誰もが知っている事実です。しかし実態は世界各国が競って調査・観測基地を設け、「我が国の領土」とばかりに国旗を掲げ、中には夫婦の研究者や軍人を送り込み、基地で生まれた子供に「出生地・南極」の証明書を発行し、南極大陸を国籍に編入したかのような国さえ出る始末。

早い話、南極大陸の地下には膨大な鉱石や石油やレアメタル（希少金属）や……。欲の皮が突っ張った国のなんと多いことでしょう。

かくいう日本も大陸に隣接するオングル島に昭和基地を開設し、早や半世紀。道民には馴染み深い南極観測船「宗谷」や奇跡の越冬犬「タロとジロ」さらに近年は、「南極料理人」がレシピ本を出版したりテレビのワイドショーでお手軽料理を披露したりと、南極物語は今でも人気と関心の的だ。

さて、私の南極ストーリーは観測でも料理でもない「こそ泥」の話。

昭和55年大晦日、私を含むTBSテレビのスタッフはアルゼンチンの首都ブエノス・アイレスから日本向けの「ゆく年来る年」という全民放テレビの生中継番組を送り出していました。話題の主は知る人ぞ知る世界的な冒険家・植村直己その人でした。

未踏峰登山や秘境探検やら体育会系の話には全く無縁の私でも、北極点単独犬ぞり走破を成し遂げたり5大陸の最高峰をつぎつぎと征服するなど、植村直己の名前だけは知っていました。しかし本人出演のテレビ番組の制作に立ち会うとは夢にも思いませんでした。

番組の内容は、植村直己が新年早々南極大陸に渡航する直前の様子を港に停泊する貨物船から日本に生中継する、というもので昼夜逆転の大晦日の正午に、真夜中の日本に向けて「良い年をお迎えください！」と、真夏のアルゼンチンから何とも気の抜けた挨拶で無事中継を終えました。

「佐々木さん、南極に行きませんか？」と文芸春秋社の安藤幹久カメラマンが耳元で囁いたのは元旦を迎えた清々しい空気（ブエノス・アイレス）の中でした。

植村直己が南極大陸最高峰のビンソン・マシフ山（5,140m）登頂準備のためアルゼンチンの南極サン・マルチン基地に一足先に渡るので同行取材しないかとのこと。南極大陸、とは思いがけない誘い。早速アルゼンチン政府の許可を取り、彼と南極を目指したのは2月でした。

植村直己の寡黙で、それでいて人懐っこい表情。

アルゼンチン空軍の大型輸送機 C130・ハーキュリーに貨物ごと積み込まれた私は寒さに歯を鳴らすばかりです。しかし貨物ネットに足を取られながら植村直己は絵はがきを取り出し、1枚2枚、と書き綴ります。今なら携帯電話や電子メールなどデジタル製品全盛時代ですが、30年以上も前のアナログ時代の話です。

もっとも、流行のファッションにはほど遠い真っ黒なサングラスと、いつもだぶつき気味の着こなしの彼が先端科学や文明の利器を珍重したかどうか。

「奥さん宛ですか？」の私の愚問にはにかみ、照れながら「ええ」と答えた目の笑いを忘れることが出来ません。

わずか1週間の南極滞在でしたが基地の犬ぞりを、またたくまに操った様や、沈まない真っ白な太陽を黙然と見つめていた姿は印象的でした。

私はといえば、日中の気温5℃前後という暖かい（日本の真冬は南極の真夏）陸地のあちこちを歩き回り、群青色の江戸切り子のグラスを重ねた様に切り立つ氷壁に声を失い、南極ブルーの波間に浮いては潜り、潜っては浮き上がるペンギンの姿に時間を忘れ、拳げ匂の果てに「南極の石を土産に」と小石をポケットに入れる始末。

「南極のものを持ち帰ってはダメ！南極条約違反です」と背後からきつい叱声。自然と対峙してきた冒険家・植村直己はさすが厳しい！と思いきや「冗談です。でも世界中の国がその気になると・・・」と表情を曇らせました。

南極土産の小石は今でも我が家の飾り棚に収まっています。その石を手にするたびに植村直己の叱声が耳元でよみがえります。

これってこそ泥で窃盗罪かな、いやもう時効かな。

南極の氷で飲んだウイスキーの味を思い出し、我が家の冷蔵庫から取り出した氷に向かってつぶやくことしきりです。

～マイク片手に叱られっ話～ ③

叱られた話を自嘲気味に披露してきましたが、これが命に関わる話となると少しばかりシリアス（真面目）な内容にならざるを得ません。

時は 1982 年 4 月 2 日、ブラジル・サンパウロのテレビがとんでもないニュースを報じました。「隣国アルゼンチーナがイングラターハとゲハー」と。前者はアルゼンチン、後者はイギリスのことで島の領有権を巡り戦闘状態に突入した、というニュースであることは語学に疎い私にも即座に理解できました。

世に言う「フォークランド（現地ではマルビナス）紛争」の勃発でした。

その日のうちにアルゼンチンの首都ブエノス・アイレス入りし、いざ市内取材へと意気込んだものの拍子抜けです。市内には車が溢れ、道行く市民の表情は平静そのもの。「戦争？」と涼しい顔の市民ばかりに出くわしました。

戦闘地域は首都から遥か数千キロも離れた島で、南極大陸から突き出した半島が指呼の距離という具合では、現実感が薄いのも宜なるかなです。もっとも私を含め外国人記者は取材・行動制限があり戦闘地域に足を踏み入れるどころか首都圏から一步も出られないと言う、何ともしまらない「従軍記者」です。

そんな事でめげる訳にはいきません。日中は市民生活や経済状況を取材し、さらには戦況を聞き出すため政府や軍関係者への聞き込みをするのですが、日本との時差（昼夜逆転の 12 時間）を考えると必然的に夜の取材活動に重きがかかります。

某日深夜 11 時、カメラマンと共に取材のまとめをレポートするため国会議事堂前でテレビカメラに向かいマイクを握っていたその時、「ケ・アシエンド？」と 3 人の兵士が詰め寄りました。日本語かつ戦時用語的に言うならば「誰何」（すいか）です。なんと 3 人の兵士の手には黒光りする自動小銃が、しかも安全装置がガチャリと外され私のどてっ腹に突き立てられました。この兵士の誰かが気まぐれにあるいは何かの弾みで引き金を引くと……！

脂汗が身体中に滲み出した事を覚えたのはいささか時間が経ってからの事でした。

深夜、パトロール中の警備兵に有無を言わず逮捕・連行され議事堂詰め所の当直将校の前に引き出された日本人記者の運命や如何に？

「戦時体制下しかも夜間外出禁止令が敷かれている。軍が警備する軍事施設（国会議事堂が？）を撮影するのはスパイ行為で逮捕は当然だ」と当直将校がスペイン語でまくしたてる。

当方もアルゼンチン政府発行の記者証をかざし英語、ポルトガル語、スペイン語はてや日本語で怒鳴り返すものの防戦一方の叱られっ話。いやはや「剣はペンより強し」か。

やがて自動小銃に追い立てられ、とある一室に放り込まれたのは午前3時。携帯電話が出現するはるか以前の話で、日本はおろか日本大使館にも連絡が出来ないまま一夜を過ごしました。

反政府分子が人知れずどこかに連行され抹殺、というまことしやかな伝聞が横行したアルゼンチンの軍事独裁政権下、1人の日本人記者が叱られっ放しながら翌日の昼前に無事釈放されたのは幸運なのか当然なのか。

私の生き方の中に「何とかなるさ」的いい加減さが有るとすれば、当時の体験がトラウマになっているのかも知れません。

今も昔も領土を巡る隣国との関係はきな臭いものです。

北方領土、尖閣諸島、竹島などなど。しかも歴史を紐解くまでもなく、政治、経済など国内問題に行き詰まった時、権力者の執る常套手段は国民の目を外に反らす、ということなのです。

当時のアルゼンチンの軍事政権は年率千パーセントという超インフレになす術もなく、財政破綻寸前の危機的状況にありました。年率千パーセントを越す物価上昇率の貨幣価値とはどんな状況でしょうか。

千円の品が1年後には1万円、即ち物価は11倍、言い換えれば貨幣価値は11分の1に下落、という事です。

タバコ1箱が35,000、タクシー初乗りが70,000（貨幣単位の呼称はペソ）など、あらゆる物価はゼロがそろそろ数珠つなぎ。3ヶ月にわたるブエノス・アイレス滞在中の私のホテルの支払いは（国際電話代込み）実に300,000,000ペソ（3億です！）。

私の人生で数えた最高額の現金である事は言うを待ちませんが、果たしてこれは日本円で幾らに相当するでしょうか？ 答えは次号で。

（ヒント・タバコ代は世界共通の物価基準です）

## 海外特派記者の備忘録

### ～マイク片手に叱られっ話～ ④

「300,000,000ペソのホテル代は日本円で幾らでしょう？」と前回はクイズで終わりました。

日本円で現金3億円なら価値も重量も大変な物ですが、何せ年率千パーセントの超インフレの国アルゼンチンの話です。しかも私が首都ブエノス・アイレス滞在中の紙幣の最高額面が20万ペソで、やがて50万ペソ札が出回る始末。

さてクイズの答えはゼロを2つ外した300万円が正解です。

ざっと計算すると1泊3万円（カメラマンとの2人分）で3ヶ月の滞在でしたから、安全な高級ホテルの宿泊代の相場としてはリーズナブルでした。

当時は1ドルが220円、22,000ペソの為替相場です。

市民経済の物価事情は100ペソが1円！ですから7万ペソのタクシー代は700円、35,000ペソのタバコ1箱は350円という訳です。  
すっかり話が横道に逸れ肝心の「叱られっ話」は何処へいった、とお叱りを受けそうです。

これはブラジル第2の大都市サンパウロでの話。  
生活にも慣れ、中古車ながら憧れのアルファ・ロメオというマイカーで高速道路を走行中の事です。  
かなり先で警察のパトカーに停車を命じられました。「速度は守っていたぞ」と身構えて停車。

警官 「スピード違反だ」  
私 「証拠は？」  
警官 「双眼鏡ですーっと視ていた」  
私 「20キロオーバーだって？」  
警官 「腕時計で秒数を計っていた」

いやはやとんでもない交通取り締まりです。  
ハイウエーを時速100キロ前後で走る車を数秒目視し、腕時計の秒針で到達時間を瞬時に計算してスピード超過を割り出した！とは。  
プロ野球のピッチャーの球速を計るスピードガンなど、まだ出現していない頃の話です。

証拠のデータなど無くても「俺が視てスピード違反だから違反だ」と高飛車に叱りっ放す職業意識はご立派。感心するやら呆れるやら。

ところがその警官は続けて「ドキュメント（免許証、車税納付済み証など書類の事）を見せろ」と事務的に言い放ち、いくら提示しても「もう1枚ドキュメント」「別のドキュメント」と迫ります。  
スピード違反していない、と頑固に主張する私は身分証明書、外人記者証など他のドキュメントを取り出すのですが警官は見向きもしません。

実はその時、私の助手兼カメラマンの日系二世が同乗していたのですが、ニヤニヤ笑うばかりで一向に通訳してくれません。業を煮やした私は「納得いかない、と君から警官に説明してくれ」と頼むと彼は「ボス、今日は何日ですか」と問い返しました。

「12月10日」と答える私に、彼はすかさず「もうすぐナタール（クリスマス）ですね」と片目をつむりました。にわかに理解できなかった私に、彼は「日本ではお札に誰の顔が載っていますか？」と涼しい顔です。  
実は「もう1枚の書類」とは大統領の肖像入りの紙幣の事でした。

聖徳太子を免許証の間に挟み「フェリス・ナタール！（メリー・クリスマス）」と私が言えば、警官は笑って立ち去れたのでしょが。。。。。

私の助手が「ボスはユーモアも通じない堅物」と首をすくめたかどうかはともかく、真実と正義を追求する生真面目な(?)日本人記者は、不正警官に臆する事なく「もう1枚のドキュメント」を差し出さず正論で問題解決を計りました。

当時のブラジルでは警官など公務員の賃金・待遇などが劣悪で、クリスマスや彼の有名なカーニバルなど大きな行事が近くなると、小遣い稼ぎに精を出し袖の下を要求する行為がまま横行します。これをブラジルでは「エンバイショ・ダ・メーザ」と言い「机の下」と訳します。言い得て妙。

目くじら立てるほどの額ではないのですが「袖の下」に慣れていない外国人記者としてはジョークの社会福祉に戸惑い、ユーモアのお恵みにほろ苦さと切なさを感じずにはいられない叱られっ話です。

## 海外特派記者の備忘録

### ～マイク片手に叱られっ話～ ⑤

前々回、交通警察に袖の下を渡すか、否かでほろ苦い思いをした「叱られっ話」を披露しました。

「郷に入りては郷に従え」の諺は十分頭に叩き込んで来たつもりですが、国の生い立ちは勿論、言語、宗教、慣習等々、あまりにも日本との違いの大きさを思い知らされる日々の連続です。

しかしその違いを笑ってやり過ごす事が出来るときはホッとすると同時に、「この国に来てよかったな」とつくづく思います。

今回はブラジル生活での1シーンを記そうと思いますが、その前に「叱られっ話」を紹介しなければ先に進めません。

ある金曜日の夕方、土・日曜日のドライブに備えガソリンスタンドに並び愛車にガソリンを入れていた時のこと。

「オイ！ ガソリンを買い占めるなよ、俺の分を残してくれ！」と後ろから叱声が飛んできました。振り返ると7～8台の車の窓から、片手を振り上げる仕草が見て取れます。すわ、日伯触発一戦交える羽目に陥るのか。

私の愛車・アルファロメオのガソリンタンクは120リットル入りの大容量です。列に並ぶほとんどの車は俗に言うビートル(カブトムシ)型の大衆車で、ガソリンタンクは40リットル入り程度です。いわば3台分のガソリンを給油する私の車に戦々恐々で、買い占め? を怒鳴って叱るのも宜なるかな、です。

しかし実は「オイ！」というのは乱暴な「怒声」ではなく、ブラジル人が誰かに「ねえ、ちょっと」と呼び掛ける気安い言葉なのです。

一瞬ドッキリし身構えた私を尻目に、給油係の少年が後ろの列に向かって「このガソリンは地球の裏側のジャポン（日本）からくみ上げているから心配ない」と片目をつぶってみせました。

いずれのやり取りもブラジル人の大好きなピアダ（ジョーク）の応酬で、険悪な様相を和やかに収めます。

さてそんなブラジル人のユーモアの源泉を垣間見る1コマに遭遇しました。

通勤途中のパウリスタ大通りの交差点（札幌の三越前交差点か）で信号待ちしている私の近くに、車椅子に乗った男性がいました。信号が青に変わるや否や1人の若い男がスルスルと近寄り、車いすの男性を反対側の歩道に渡しました。

20 数年前の札幌市内では、車椅子を利用して出勤したり外出する人の姿はそう多くは見受けられませんでした。もし当時、信号待ちする車椅子の人がいて手助けする市民がいたかどうか。うーん、自信は有りません。

しかし次のシーンに私はブラジル人社会の奥の深さとブラジル人の温かさ、そして柔らかいジョークの発露を見る思いがしました。

車椅子を押し、横断歩道を渡したのは角にあるガソリンスタンドで働く顔見知りの青年でした。しかもその青年は渡った先でなんと更に、道行く人にその車椅子の介助をリレーの如くバトンタッチしたのです。リレーする方もされる方も、何の躊躇もなくごく当たり前に、車椅子の背を押していきました。

日本に比べ貧富の差が激しく、街の至る所には物乞いをしたり、小銭をせびる老若男女やトロンバジンニョと呼ばれるかっぱらい少年、更には本物の拳銃を突きつける強盗が溢れていました（日本と違い拳銃は極めて安価でかつスーパーマーケットでいとも簡単に入手可能、むしろモデルガンの方が遥かに高く入手が困難です）。

そんな彼らが社会の底辺で細々と生活している事は十分承知していましたが、ガソリンスタンドで働くその青年ですら身分は不安定で低賃金で働いている事も承知していました。けれども彼らが、自分より更に生活環境が厳しい者やハンディキャップを負った者に対し見せる心優しい態度。爽やかである以上に感動さえ覚える私でした。

歩道を足早に戻って来たガソリンスタンドの青年の肩を軽くたたいた私に、青年は「ナーダ、ナーダ」と涼しい顔を見せました。

「ナーダ、ナーダ」とは、北海道弁ならさしずめ「なんも、なんも」といった所か。

日常生活の至る場面で出くわすブラジル人の「なんもさ、なんもだ」は、もしかすると善人も悪人も持ち合わせている底抜けの明るさと、優しさ、そして善悪や敗者・勝者など全てを洗い流す「ピアダ」の源泉で有るのかもしれませんが。



～マイク片手に叱られっ話～ ⑥

「叱られっ話」も今回が最終回。

不慣れな外国生活は何かと不便、不自由、不安の毎日ですが「住めば都、暮らせば天国」とばかり、多いにブラジル生活をエンジョイしたのも確かです。

当時のブラジルはそれまでの軍事政権が暴力的な革命騒動を経ず、民主的な選挙によって共和国家に生まれ変わる、という中南米に在っては極めて希有な存在でした。その根底にはブラジルがそれまでの宗主国ポルトガルに加えドイツ、イタリアなどを中心とした、ヨーロッパ諸国からの移民により成り立つ多民族国家であり、豊富な資源を背景にした中進国としての地位を保っていた、という歴史的経緯が在ります。

確かにインディオと呼ばれる原住民や、遅れて移民して来た中国人や日本人など非ヨーロッパ系人種には艱難辛苦が待ち構え、ヨーロッパ系人種と対等に社会進出するには様々な障害、差別が有り時を要したのは事実です。

しかし21世紀のいま、国会議員や高級官僚、財界人として活躍する非ヨーロッパ系の姿は枚挙にいとまがありません。とりわけ南米諸国にあってガランチード（保証付き）と前置きがつく真面目な日系人の活躍とその存在感は群を抜いています。事実、隣国ペルーで日系のフジモリ大統領が誕生したのは記憶に新しいところです。

「保証人不要・敷金無し」のワンフロア 100坪近い高級マンションの持ち主はイタリア系のドナ・（婦人への尊称）レオニュウダ未亡人。私が「日本人」というだけでニコニコ顔でワンフロアを貸してくれました。しかし彼女の誤算は私が少しも「保証付き」でない事を知らなかった事です。

私が居を構えたサンパウロは標高 400メートルの高原地帯に位置する為、冬（7月から9月）の朝夕は結構冷え込み、摂氏 10度前後と暖房が欲しくなります。広大なブラジルは高温多湿のジャングル地帯と想像されがちですが、それは熱帯のアマゾンや海に面したりオデジャネイロ市など一部です。アルゼンチンの国境に近い南部のポルトアレグレ市などは雪さえ降る「北国」並の寒い国なのです。

そんな冬の生活に欠かせないのが風呂ですが、残念ながら肩まで浸かる事が出来る日本的な風呂は有りません。シャワーと底浅いバスタブだけで富士山のタイル絵など期待すべくもありません。

しかし日系社会がしっかり根付いたサンパウロでは日本人移民が郷愁にかられ、知恵と技術力を遺憾なく発揮し、断熱材入り強化プラスチック製の底の深い和式風呂を作り販売していました。

早速購入したもののブラジルのバスルームには収まりが悪く、止むを得ず狭いシャワールームに据え置かざるを得ません。しかも使用方法は信じ難い事に、水を張ったその風呂に掃除機並の大電熱棒を突っ込み湯を沸かす、という感電覚悟の入浴を強いられる代物。サンパウロの入浴は命懸けなのです。

勿論足を入れる前に件の電熱棒は引き抜き、文字通り雷に打たれたような気分で熱湯に浸ります。しかしやがて間もなくその「和式風呂」がとんでもないお叱りを受ける事と相成りました。

「和式風呂」の温もりにどっぷり浸り小1ヶ月ほど過ぎた頃、1階下のドイツ系ブラジル人が血相変えて我が家に怒鳴り込んできました。

「日本人と戦争する気は毛頭ないがバスルームの壁が水浸しだ。一体どれだけ水を流せば気が済むのだ！」と私を現場検証に立ち合わせました。

「和式風呂」はシャワーと違い使用後は一気に排水する為、ブラジルの排水設備ではオーバーフローし、水漏れを起こしたらしい。

先ずは事実を認め、家主のドナ・レオニューダ未亡人に「排水設備の欠陥に由る水漏れは私の責任に非ず。階下の壁の修復費用及び完全なる配管費用は家主が負担すべきもの」と平然と（通訳を通じ）「保証付きの日本人」は言い放ちました。

家主のドナは「保証付き日本人」に契約書無しで賃貸しした事を悔やむも「ドノ（紳士・主人などへの尊称）サアッサアーキ！ 帰国する時にこの和式風呂を私に無償で置いていくなら」としたたかな取引。

「う～ん、イタリア女性もやるもんだ。」  
帰国時にはもう無用の長物だけに二つ返事でOK。

かくして階下のドイツ系住人とイタリア系家主と「保証付き日本人」の三国同盟はめでたく手打ち。その後ドナ・レオニューダ未亡人は「和式風呂」をいたくお気に入りのようで、感電もせずご満悦との事でした。（了）